

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：32615

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720036

研究課題名(和文)鬼神論における民間信仰と呪術：宗教社会学的議論の分析

研究課題名(英文)A Socio-Religious Analysis of Folklore and Mysticism in 'Kishinron'

研究代表者

鈴木 孝子 (SUZUKI, Takako)

国際基督教大学・アジア文化研究所・研究員

研究者番号：70459006

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：新井白石の『鬼神論』を他の儒者と比較し、彼の著書において展開された怪異現象に対する詳細な分析と類型化の作業が宗教政策上の問題意識から出発したものであることを浮き彫りにした。白石の活躍した時期は、幕府の宗教政策が既存の教団および宗教組織に対する統制から民間の組織的行動全般に渡る治安維持へと方向転換を測った時期と軌を一にする。白石は『鬼神論』を執筆する過程で多様な信仰形態への関心を深め、秩序の維持を進める上での指標を作ったと想定される必要がある。

研究成果の概要(英文)：Arai Hakuseki's 'Kishinron' is known to have a detailed analysis on ghosts and supernatural events. Japanese scholars have long considered this work as evidence of Hakuseki's rationalism on such matters. Kishinron or the Neo-Confucian discussion of afterlife reflects concerns for religious policy. Arai Hakuseki's detailed discussion on the Supernatural must be understood within this socio-political background for social order and religious polity. This research has focused on Hakuseki's interest on folklore and supernatural events as a reflection of his political interest on local beliefs. In order to illuminate Hakuseki's religious views it is necessary to compare his work with other early modern Japanese intellectuals. Hakuseki had no intention to promote occult or mysticism; he was making effort to present a guideline to identify licentious cults and dangerous religious movements.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：儒教解釈 鬼神論 民俗学 民間信仰 宗教政策 日本思想史 異文化理解

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は新井白石の『鬼神論』(『新井白石』日本思想大系 35 岩波書店 1975 年所収)より出発し、この著作を中心に進めてきたものである故に、最初に新井白石研究の総括を行い、次いで鬼神論研究の総括を行うこととしたい。まず、新井白石研究においてケイト・W・ナカイ著(平石直昭・小島康敬・黒住真訳)『新井白石の政治戦略 儒学と史論』(東京大学出版会 2001 年)を挙げるべきであろう。ナカイはここで新井白石の歴史観と外交政策等に内在する政治戦略を分析し明示した。ナカイは白石の主要業績が將軍を国王とし、軍事文事双方の権威を持った統治者として位置づけようとしている点を指摘している。この業績の画期的な点は、白石の多方面に及ぶ主要業績を横断的に分析し、將軍の地位にまつわる曖昧さを解消し、名実ともに正当な統治者として位置づけようとする戦略に基づいていたという説得力のある切り口を提示した点にある。無論、ナカイ以前にも網羅的な新井白石研究を行った研究者として宮崎道生の名を筆頭に上げるべきであろう。しかし、宮崎は新井白石の合理主義精神と博覽強記に焦点を当て、個々のテキストを別個に分析するという研究方法を取るため、新井白石の学問、白石の問題意識の全体像を読者が把握するには困難な側面があった。ナカイは白石が力を注いだ歴史学と外交に関する改革案を軸に白石の学問の全体像を提示したと言える。ナカイの研究成果により、その後の新井白石研究は彼の歴史学と外交に関する問題を中心に展開することとなった。しかし、白石の『鬼神論』に関してはナカイも多くを語らない。ナカイは『祭祀考』(『新井白石全集』第六巻 国書刊行会 1977 年所収)に記された政治的文脈を総括するに留めている。政治戦略を分析する以上これは然るべき立場であろう。一方、宮崎道生は白石の合理主義を裏付ける証拠として『鬼神論』を取り上げ、精緻を極める分析を展開している。宮崎の研究は、テキストの用語法、引用文献の特定など正確な情報を詳細に列挙する一方、これらの情報が何を意味するか、テキストに内在するメッセージ、著者の執筆意図等を議論に対象としていない。概して『鬼神論』は白石の知的営為の中で扱いきれない著書として重視されることはなかったと言える。新井白石の『鬼神論』は、その全体像が結ばれないまま現在まで来たと言わざるをえない。

これに対して、近世日本の鬼神論研究に目を転じて、新井白石の『鬼神論』を理解するための説得力のある議論が無かったといえる。近世日本の儒者による鬼神論の分析は子安宣邦が『鬼神論 儒家知識人のディスクール』(福武書店 1992 年)を起点に進めてきた。儒者のディスクールとしてそれぞれの思想家の鬼神論を分析し、議論の方向性を示し問題提起をした点で子安の貢献は無視でき

ない。しかし、子安も新井白石の『鬼神論』に関しては、合理主義的な営為の一環として位置付けている。子安は鬼神論を純粹にディスクールとして議論を展開し、問題提起も純粹に思想哲学の領域内に限定する傾向がある。子安は平田篤胤の幽冥観の分析を中心議論に進めており、平田篤胤が『新鬼神論』を執筆する際に新井白石の『鬼神論』を参照している点も踏まえ、両者を対照させている。新井白石と平田篤胤双方の議論の比較は参考になる。しかし、新井白石のように政治的議論を多く展開した思想家の『鬼神論』を取り上げる場合、純粹に思弁的な領域で分析を進めるのは問題であろう。一方で、鬼神論に内在する死生観と社会科学的な領域の接点に注目した研究もある。小島康敬の「幕末期津軽の民俗学者・平尾魯僊 平田篤胤と柳田国男の間」(「市史ひろさき年報 10」弘前市 2000 年 pp.10~45 所収)小島は平田篤胤の鬼神論、幽冥観を下敷きに地方の藩にて民俗学的研究と問題意識がいかに形成され展開されたかを分析し、説得力のある議論を展開している。小島は儒教的死生観がいかに民俗学そして民政を担い地域の安定と秩序を目指す平田国学の活動に還元されたかを問題提起したが、思想哲学と現実の政治運営の現場がいかに切り結ぶかを提示した意味は大きい。本研究もその問題提起を継承し、議論の充実に貢献できるよう進められたものである。

以上、新井白石の『鬼神論』は合理主義の反映とする先行研究が多く、その著書と主題に内在する政治性を取り上げた研究が立ち遅れていた。また鬼神論全般の研究も見ても思想哲学上の問題として自己限定の上で議論を展開する傾向が見られたと言える。

### 2. 研究の目的

新井白石の『鬼神論』には政治的問題意識が強く反映されており、特にテキスト内の民俗学的な議論の中に謎を解く鍵があると想定される必要がある。新井白石は『鬼神論』において、怪異現象に対する類型化と要因分析を展開している。この熱心かつ詳細な分析は白石の宗教政策上の問題意識から出発したものである。無論、白石の『鬼神論』においては経書および中国の古典籍・小説類からの引用が多くを占める。しかし、この日本人の信仰形態の多様性を明示する出発点にもなった点も見落としてはなるまい。この点を明らかにするために白石と他の儒者との比較分析を進める立場を選んだ。各々の儒者が鬼神論を執筆する際の動機、また民間信仰に関する議論を展開する際の特徴を整理した。鬼神論は単に思想哲学上の議論に終始せず、治安維持と国家観にも波及する問題なのである。

### 3. 研究の方法

新井白石と他の儒者の鬼神論を比較するために各々の著書を読解し、相違点を整理した。次いで当時の宗教政策および経済状況、

国際情勢等を参照しつつ比較分析を進めた。

比較を進める上で便宜上近世を4つの時期に分けることとした。まず、新井白石以前の時代、次に新井白石とはほぼ同時代、三番目に18世紀の終わりから19世紀初頭にかけて平田国学の隆盛に向かう時期、最後に幕末から明治維新に向かう時期に分けた。新井白石以前の思想家は林羅山と山崎闇斎を中心に比較を進め、同時代の時期からは荻生徂徠と太宰春台を選択した。三番目の段階では平田篤胤を比較対象とし、最後に後期水戸学特に会沢正志斎と比較を進めた。各思想家の思想形成を明確にするために、彼らの著書、文献以外にも、当時の社会状況と照合の上問題意識の背景を理解するよう努めた。注目した点は以下三点である。第一に思想家自身の宗教政策上の問題意識の内実に着目した。第二に彼らの中で民俗学の問題意識はどの次元で生かされ展開されているかを精査した。近世期、宗教信仰の組織形態、行動形態は年代と地域によって相違する。既存の教団以外の動向に知識人たちが意識し始めたのはいつ頃からなのであろうか。また民間の習俗とくに宗教的行動様式を議論の主題とした時期と理由はどこにあるのかを問題提起し続けた次第である。そして最後に、彼らが葬送儀礼の問題をどの次元で認識し議論を展開しているかも検討課題として含めた。鬼神論には儒教祭祀の実践という議論が内在しているからである。葬送儀礼の様式を仏式にするか儒葬にするべきかを検討しているか否かを確認した。以上三点の問題提起により、勢い法制史、および当時の都市問題も想定することを余儀なくされた。また、可能な限り地方への影響も考慮しつつ文献調査を遂行した。特に山崎闇斎を分析する局面では、高知、会津に資料調査に向かい、崎門派朱子学を藩学とした新発田藩が受けた影響も考慮に入れた。

#### 4. 研究成果

新井白石の『鬼神論』にて展開された怪異現象に関する詳細な類型分析は治安維持という宗教政策上の問題意識から出発したものであり、政治的な配慮に基づく形で民俗学的な議論が展開されたと想定される必要がある。白石の『鬼神論』により日本の民間信仰の動向が議論の主題となり、日本における民俗学問題意識の後押しをしたと考える必要がある。新井白石以後、民間信仰への関心は治安維持の観点から高められて行った。また、19世紀に入り幕末に向かうにつれ、都市化とそれに伴う社会共同体の崩壊が宗教学的な問題意識を高め、一見民俗学的に見える事柄も含めて政治的なメッセージを運ぶ器として機能した。以上の点を国内外の学会にて学会発表を行い、日本語と英語の双方で研究成果を発表した。海外に向けての情報発信の充実は求められる事を痛感して本研究を終えた次第である。以下、年次ごとに詳細を報告する。

2010年度は林羅山と山崎闇斎を新井白石と比較する作業を遂行した。林羅山の鬼神に関する言及は彼の『神道伝授』(『近世神道論・前期国学』日本思想大系39 岩波書店1972年所収)にあり、鬼神に関する解釈も朱子のそれと大差はない。しかし、林羅山が広義の超常現象を熱心に取り上げて論破を試みている著書がある。それが『本朝神社考』(『神道大系論説編二十 藤原惺窩 林羅山』神道大系編纂会1988年所収)である。名僧知識な僧侶による数々の奇跡靈験など民間信仰の次元に根を下ろしている伝承を根拠不明瞭なものとして批判を展開している。林羅山の配慮は、神社の縁起に神仏習合的な混交が横行している現状を改善し、正しい祭神の特定と定義付けに集中している。彼は儒教と神道を結びつけようと奔走しており、反仏的な立場から仏教的な色彩、特に奇跡靈験談を払拭しようとしていると想定される必要がある。なお、徳川幕府草創期は宗教政策が既存の教団の統制を強化することに向けられており、危険な動向を示す団体を管理する方針で宗教政策が展開していたといえる。また、近世期に入り日本では製紙産業が大幅に発展し、出版業の隆盛を後押しすることとなった。林羅山の『本朝神社考』も、視点を変えれば儒者としての啓蒙活動の一環であり、書物による共通見解の形成を目指して根拠不明瞭な伝承の特定と批判排除であったとも言える。その意味で林羅山も宗教政策上の問題意識から流布する民間伝承の批判を展開した一人といえる。ただ白石と相違する点は林羅山が仏教寺院および僧侶を対象に批判分析を加えている点であろう。『本朝神社考』の中では天狗に関する一文も含まれているが、やはり仏教批判的な色彩が強いことは疑問の余地がない。なお、これらの点に関して と の学会発表として成果を出した。 の発表では江戸期の出版業の発展と製紙産業の隆盛を議論の背景として取り上げたが、現在に至る日本の紙文化、高品質な紙製品へのこだわりを比較文化的に考える契機ともなった。

一方、山崎闇斎であるが高知と会津若松、京都への資料調査に専念した。山崎闇斎の思想形成を理解する上で彼の生い立ちおよび彼を賓師と迎えた保科正之との関係を考え、特に高知と会津での宗教政策および寺院整理等を考える良い機会となった。現地に直接足を運んで見えるものがあることを知った次第である。また崎門派は儒教的な葬送儀礼の実践を厳格に義務付けていたが、その背景に触れ、考察する機会を得た。

2011年度は新井白石と同地代の思想家たちとの比較分析を進める年度となったが、現段階でも課題として残された部分が多いことを反省とともに報告する。研究成果としては の学会発表が上げられる。また資料調査で京都大学と東北大学に行く事ができ、さらに崎門派朱子学を藩学とした新発田藩の動

向を知るべく新発田市立図書館にも赴いた。

学会発表では太宰春台に焦点を当て、荻生徂徠を参照しつつ発表をした。荻生徂徠が礼楽論の中で展開している鬼神論の分析は今後の課題として残った。荻生徂徠の宗教政策上の問題意識は『政談』『太平策』（『荻生徂徠』日本思想大系 36 岩波書店 1973 年所収）等にも含まれ、明確である。根拠不明瞭な「一種の流行り神」が祭り上げられていること、些細なことから神信心が発生することなど彼も指摘している。彼が現実を重視した政治観を持っていたことを裏付ける見解である。同様に、太宰春台は一層踏むこんな形で当時の宗教的動向に批判を加えている。太宰春台は『聖学問答』（『徂徠学派』日本思想大系 37 岩波書店 1972 年）儒教的見地から推奨できない宗教活動の事例として日本の多様な神信心を列挙している。これは当時の実情を知る民俗学的資料としても興味深いリストである。いずれにせよ、宗教政策上の問題意識が既存の教団の組織統制から草の根レベルの宗教活動へと拡大してきていることが確認できる。幕府の治安維持の重心が民間レベルで自然発生する熱狂的集団行動・団体活動へと移行したのである。課題は多いが、白石と荻生徂徠太宰春台との比較を進めて浮上した疑問点は以下のとおりである。荻生徂徠は鬼神論を論ずる際に、必ず礼論という儒学の枠組み、政治的模範解答の書式に従う立場を貫いた。彼は正当な葬送儀礼の実践を考証する論考も残している。また『雷徂徠天狗説』（東北大学狩野文庫所蔵 狩 2 - 2764 - 1）という一文も記している。この『雷徂徠天狗説』の資料的価値、および荻生徂徠の礼楽論の中でどのような位置づけを持っているかは、今後の課題としたい。だが少なくとも、荻生徂徠が怪異現象に関する好奇心を、必ず政治的な枠組みから排除している点に留意したい。荻生徂徠と新井白石の礼楽論は共通点が多いと指摘されるが、荻生徂徠の方が学者の体面を保つ配慮に秀でていたと仮定することも可能である。

太宰春台も日本の民間信仰の動向を論ずる際には必ず批判的、それも否定的な文脈で取り上げて議論を進めている。民間の宗教動向に対して政治的な配慮を持つのであれば、この両者の示した姿勢こそ模範的であろう。それでは何故に新井白石は『鬼神論』を執筆する中で怪異現象に関する考察を祭祀論、儒教的宗教政策を扱う同じ著書の中に含めて展開したのであるか。無論、政治色を全面に出した『祭祀考』が彼の宗教観、死生観を総括した結論だと言うことも可能である。しかし依然として白石が後世、響響をかうような議論を綿々と論述した謎は解けない。山片蟠桃は『夢ノ代』（『富永仲基・山片蟠桃』日本思想大系 43 岩波書店 1973 年所収）にて新井白石が怪異現象に深入りしている点を強く批判しているが、やはり読者が疑問を感ずる内容である。『鬼神論』は読者を煙にまく

も同然な読後感を与えたい。単に新井白石が課題の多い著書を残したと片付けるのは問題である。白石の政治意識と宗教観の形成を踏み込んで考える必要がある。

今ひとつ残された課題は新井白石が何故葬送儀礼に関する考察を展開しなかったかである。この問題に深く切り込めなかったことが 2011 年度最大の反省点である。新井白石と山崎闇齋と荻生徂徠三者の比較検証を今後の課題として残すこととなった。

なお、2011 年度は新発田市立図書館にて資料調査を行い、藩校で使用された教科書藩版を閲覧する事ができた。新発田の文化学問に関しては帆刈喜久男「新発田藩の学問と教育」（『近世越後の学芸研究』高志書院 2002 年所収）に詳しい。しかし、新発田市立図書館の資料管理担当者からは新発田藩の藩学に関する研究は今後の研究に待たれる旨の説明を受けた。地方で儒学その他の主要な学問潮流がどのように受容されたかを分析する作業も重要であろう。また、新発田藩で農民町人をも対象として教育教化活動に熱心に取り組んだ実情が鮮明に浮かび上がった。儒教儀礼の厳格な実践を説いた崎門派朱子学も、地方の藩の日常に根を下ろし、地域と歩む選択をする過程でどのような方針を掲げたのか、今後の課題としたい。

2011 年度の疑問点は 2012 年度の研究で解明できた部分と一層謎が深められた側面と双方ある。2012 年度は学会発表にて成果を上げることができた。新井白石の『鬼神論』と平田篤胤の『新鬼神論』（『平田篤胤・伴信友・大国隆正』日本思想大系 50 岩波書店 1973 年所収）には明確な相関関係があり、平田篤胤は表面上新井白石を批判しつつ、多くの面を継承していることが明らかになった。平田篤胤は民間信仰、民間の宗教動向を積極的に取り込み、崩壊しつつある地域社会の秩序の立て直しに取り組んでいることが鮮明に浮かび上がった。白石の想起した問題意識が、平田篤胤という後継者によって発展を見たという方が正しいかもしれない。ただ、平田篤胤は自分の信念を体系化する傾向のある思想家であり、民衆の中に畏怖の念を想起させるべく邁進している側面がある。平田国学の宗教解釈は先行研究において様々な側面からの分析が試みられている。その中で都市性、都市文化を主軸に分析を進める立場があるが、リサーチの結果、論者もそれに賛意を表する次第である。より厳密に言えば、平田国学の原動力は、都市化商業化の弊害と都市生活の破綻に基づいていると想定される必要がある。伝記的なことは中川和明『平田国学の史的研究』（名著刊行会 2012 年）に詳しい。知識人として見通しの立たない、経済的に困窮した中で都市生活を送ることは精神的な負担を論者に強いる。その中で平田篤胤は、守るものもなく失うものもなく、もはや怖れるものが無くなった人間がいかに早く墮落し暴走するかを実体験の中から見抜

いたと想定する必要がある。平田が著書の中で畏怖すべき神の存在、個々人の道徳的に行いに応じて審判を下す神々の存在に固執し、その実在性を立証する必要が生じた要因はここにあると考えられる。この原体験を起点として『新鬼神論』以後の彼の民俗学的著作の数々が執筆されるのであり、それらは単純に民俗学の先駆的研究と賞賛できない政治的配慮と計算が内在しているのである。また近年の研究動向では平田国学の地方における受容、特に弟子たちの活動内容に研究の重心が移っている。確かに平田篤胤の著作を読むと弟子たちの協力と情報収集網に平田篤胤が依存していた面が浮き彫りになる。平田自身の啓蒙活動にも興味深い側面があり、東北大学での資料調査の過程でこれはヒントとして与えられた。『玉禪』(東北大学狩野文庫所蔵 2 - 1500 - 10)に於いて、篤胤が都市化、都市生活者を意識した議論を展開していた。穢れを清め宗教的な清浄を保つことは、神道はもとより他の宗教でも宗教的規範及び律法として明記されるものであるが、その信者の文化圏の生活習慣を反映するケースが多い。今後の課題としてより議論を充実させてゆく予定である。なお、『勝五郎再生記聞』(『新修平田篤胤全集』第九巻平田篤胤全集刊行会 1976 年所収)を中心に 2013 年にギリシャの国際学会にて英語で学会発表をしたが詳細は次の項に譲ることとする。最後に 2012 年度の日本思想史学会の会場が愛媛大学であり、松山に行くことができ、山崎闇斎と縁のある高知と比較できたこと、さらに明治維新以後日露戦争にかけての近代日本史を考える有意義なきっかけとなった。現地に直接趣くことの大切さを改めて実感した年度であった。

2013 年度は最終年度にあたり、海外の国際学会にて英語で学会発表をするという最大の課題とともに、後期水戸学と新井白石の比較をするという 2 つの課題を与えられた年度であった。まず、国際学会での成果から報告し、次いでそれが後期水戸学の内容理解に寄与した点を報告したい。

海外は年度の区切りが 9 月から新年度となる故に国際学会の発表申請受付期日は 2013 年 1 月 30 日となっていたことを確認したい。

はギリシャ・アテネにて開催された国際学会にて英語で学会発表をしたものである。英語で『勝五郎再生記聞』を取り上げ、平田篤胤が輪廻転生をいかに国学の文脈に移入して論じているかを英語で発表した。海外にて開催される国際学会には想定外なことが次々に起こることを実体験で確認した次第である。当日、発表会場で司会者から人数が多いために発表 20 分質疑応答が 10 分が発表 15 分質疑応答 5 分に短縮する旨を急遽告げられ。読み上げ原稿の変更をその場で余儀なくされた。また、司会者が Japan Studies の専門家ではなかった事も手伝い、「輪廻転生を扱うテキストは、当然仏教研究の部会で発表

すべき」という先入見に基づいた総括を英語で切り出した。結果として当方は英語で反論を余儀なくされ、英語で日本思想史概論を 3 分でやり遂げる大技を決めるに至った次第である。ありがたいことに発表会場の参加者には議論の概要と問題の所在が伝わり、発表に対する否定的な評価は避ける事ができた。しかし、平田篤胤の研究がほぼ日本語のみで遂行され、しかも日本人研究者の側から英文での研究業績がほとんど参照されていない実情を鑑み、今後日本人研究者による英語での情報発信は急務であると痛感して帰国した次第である。日本思想史の学問的市場を拡大する余地そして可能性は大いにある。初めての欧州単独行であり手続きが煩雑を極めたが、良い経験知を積んだとこと、何よりも自信と研究へのモチベーションを高めることが出来た。今後は Japan Studies の国際学会にて海外で発表をし、さらに機会が許す限り海外に行って他分野の海外の研究者とも共同研究を進めたいと希望するに至った。

このギリシャ行きの次に の学会発表を成し遂げた。後期水戸学の先行研究は歴史観と名分論を中心に進められてきた。この傾向は海外でも同様であるが、J・ヴィクター・コシュマン著(田尻祐一郎 梅森直之訳)『水戸イデオロギー 徳川後期の言説・改革・叛乱』(ペリカン社 2000 年)においては、この学派的社会的影響力をも含めた分析が展開されている。先行研究の総括に十分な時間が使えなかったことは認める。しかし、共通見解、模範解答をトップダウンでいち早く組織の末端にまで徹底するという行動指針は国家運営から社会生活の維持に至るまで一貫した姿勢であると想定される必要性を主張した。その中で、会沢正志斎の『新論』(『水戸学』日本思想大系 53 岩波書店 1973 年所収)の鬼神論と宗教政策特に思想統制のあり方を分析して整理した。国内外の危機を想定しつつ相沢が民間の怪しげな宗教動向は全部取り締まり対象として掲げている。その背後にあるのは日本の独立が脅かされているという危機感である。後期水戸学の思想的影響が、政治体制の変革にも左右されず、国民道徳そして国家神道の中で残った理由は、共通見解の周知徹底を迅速かつ正確に行うかという行動様式に立脚しているからではないか。近代以後の思想展開を射程に入れつつ、最終年度のリサーチを終えた。京都大学、東北大学そして茨城県立歴史館へも資料調査に行った。現在後期水戸学の経緯、政治論、特に農政・民政を調べている段階である。

補足であるが、ギリシャで学会発表したことも大きなヒントとなった。文化形成においてより大きな時間軸と空間認識が求められるのではないか。南欧、この場合はギリシャであるが、文字通り「文明の十字路」であり、否応なく諸民族の文化交流と、めまぐるしい王国の興亡が展開されてきたことを実感して帰国した。欧州、何よりも「西洋」こそ、

実は多様性を内包しているのではないか。俯瞰的な視点で欧州そして西洋文明を見る必要があると痛感した次第である。改めて振り返ると、日本の知識人による欧州理解はイギリス・フランス・ドイツの三カ国を中心に展開され、南欧を議論に含まない傾向があったのではないか。欧州にそして西洋おける横断的な俯瞰的な視点、問題意識なり研究業績が求められていると言わざるをえない

手続きに追われて論文を書く段取りの形成に反省点が残った。しかし、豊かな機会を与えていただいたことに対し、日本の国と国民、事務的にサポートしてくれた国際基督教大学アジア文化研究所と国際基督教大学研究支援グループの皆様から謝意を表したい。そしてこの4年間、私の研究を支えてくれた家族、先生方、友人たち、お世話になった皆様、そして授業で出会った学生たち一人一人に心から感謝したい。以上をもって本報告を終えることとする。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 6 件)

鈴木孝子「後期水戸学における鬼神論の位置付け—新井白石との比較分析を通じて」日本思想史学会 2013年10月20日 東北大学

鈴木孝子(SUZUKI, Takako)

“Reincarnation under a new perspective: Religious views and social awareness in Hirata Atsutane’s ‘Katsugoro saisei kibun’” XXIII World Congress of Philosophy, 2013年8月7日 University of Athens, School of Philosophy, Athens, Greece

鈴木孝子「平田篤胤の『新鬼神論』における新井白石の思想的遺産 比較分析を通じて」日本思想史学会 2012年10月28日 愛媛大学

鈴木孝子「鬼神論と政策論の展開 太宰春台を中心に」日本思想史学会 2011年10月30日 学習院大学

鈴木孝子(SUZUKI, Takako) “Political Interests and Religious Miracles in Hayashi Razan’s Honchojinjako” The Fifteenth Asian Studies Conference Japan (ASCJ)2011年6月26日 International Christian University, Tokyo

鈴木孝子「林羅山『本朝神社考』における靈験の位置付け—社会科学的な分析への射程」日本思想史学会 2010年10月17日 岡山大学

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等  
なし

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 孝子 (SUZUKI, Takako)

国際基督教大学・アジア文化研究所・研究員

研究者番号: 70459006

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし